

パウロの“強さ”と“弱さ”について：脳科学的試論

2020年2月2日 経堂聖書会 前講 山口 和彦

パウロの著作が難しい、と感じる理由の一つに、“主張の矛盾”と思える表現があります。もっとも典型的と私が感じるのは2コリント書 12.10 “私は、弱い時にこそ強いからです” があります。この前の箇所ではパウロは“弱さ”にはサタンから与えられた身体的なトゲと、侮辱、困窮、迫害、行き詰まり、のような宗派的な敵から与えられたものを挙げています。両者は性質が違いますが、パウロの“誇り”を砕き、彼を弱くする、という共通性があります。では、パウロの“誇り”とはなんでしょう？それは“ヘブライ人、イスラエル人、アブラハムの子孫、キリストに仕える者”（2コリント 11.21-23）ということでしょう。他の箇所（マタイ 11.1）（フィリピ 3.4-6）（ガラテヤ 1.13-14）でも同様、パウロの誇りは出身、律法を誰よりよく守っていること（回心前）、キリストの伝道行為を主に熱心に行っている実績（回心後）等でしょう。これらの誇りは目に見えるものであり、尺度、評価基準で査定すれば、決してだれにも負けていない、という“強さ”に裏打ちされた“誇り”なのでしょう。

この、目に見える強さに頼る性質はヒトのみならず動物界に共通しています。数10億年の進化の過程で強いものが弱いものに勝ち、強いものの遺伝子が残ってきた、と考えられるからです。（“利己的な遺伝子”ドーキンス、紀伊国屋 1991（1976））。しかし“知恵”を持ってしまった人間が争うことは動物とはレベルの違う悲惨な世界をもたらします。そのため文化により、利己的、競合的行動（“弱肉強食”）を抑制することが試みられました。例えば“モーセ律法”を与えられることで神を愛し戒めを守るよう要請されました。しかし目に見える律法は人々の間の競合的利己心、分断、差別を止揚することができませんでした（文字は殺し、霊は生かします。2コリント 3.6）。目に見える基準で自己評価をし、他者より自分は偉く、“点数”の低い者は自分より劣ると見なし、無視、差別する性向は、残念ながら今も多く“この世”の中に残っています。偏差値、学歴、年収、地位等々、さらにはタワーマンションの住んでいる階による序列もあるそうです。動物と同じ“弱肉強食”のDNAは確かに私たちの中にあります。

この比較して序列をつける競合性向は脳の中にあると考えられます。ヒトの脳半球は左右一対あり、左右脳半球は脳の橋という意味の“脳梁”でつながっていて、数100万本の神経線維が両者を連絡しています。第二次大戦後のアメリカで、薬物治療の効かない重篤なてんかんの治療のために、脳梁切断手術が行われ、てんかんの症状は非常に改善し、日常生活にも影響は認められませんでした。しかし両半球の関係を動物で調べていた生物学者スペリーは巧みな実験により、左右離断脳の患者さんを調べ、左脳半球は言語機能の他、計算、計量等、分析的機能を分担し、右脳半球は空間認知、形や顔の認識、物品の用途、意義の理解（名称は言えない）等、統合的機能を分担しているということを見出しました（1981年ノーベル賞）。競合的な場面で何かを定量比較し、どちらが上か下か、判断する時、左半球の働きが大きく寄与していると考えられます。また離断脳患者は左手（右半球の指令を受ける）を思い通りに動かせなかったり、あるいは左手が勝手に動くと感じたりするそうです。このことは離断脳患者においては主観的自己意識は左半球の働きであり、右半球の働きは意識に上っていないことを示唆しています。しかし、画像を右半球だけに送り（左視野だけに画像を示す）、関連ある物品を左手で探して選ばせると正しく選択することができます。しかし言葉では何故それを選んだか、説明できない

のです。これは右半球は働いているが、その働きはいわば“意識下”になってしまい、言語半球（左半球）の陰に隠されている、と考えられます。左右半球が数 100 万本の神経線維で連絡を取っている私たちの脳ではこれ程はっきりしないかも知れませんが、言語中枢のある左半球が、自己意識において、相対的に優位に立っていることは否めません。ただ、以上の発見は広く認められたものですが、脳の左右の働きの違いには怪しい俗説が多く出回り、OECD も怪しい“神経神話”に惑わされないよう、注意を喚起しています。

また別の報告がありますが、これは女性脳科学者本人が左半球の脳出血を経験し、幸い出血のペースが遅く出血部位が命にかかわる場所から離れていたため、手術、治癒後にその間の主観的経験を後で綴ったものです(ジル・ボルト・テイラー “奇跡の脳 My Stroke of Insight”, 2006、新潮文庫、TED)。

脳出血の朝の主観的体験では、「言語中枢が徐々に静かになるにつれて私は人生の思い出から切り離され、神の恵みのような感覚に浸り、心がなごんでいきました。...意識は悟りの感覚、あるいは宇宙と融合して“一つになる”ところまで高まっていきました。...私は自分を囲んでいる 3 次元の現実感覚を失っていました。...どこで自分が始まって終わっているのか、というからだの境界すらははっきりわからない。...からだは、個体ではなくて流体であるかのような感じ。まわりの空間や空気の流れに溶け込んでしまい、もう、からだと他のものの区別がつかない。..... 相手の言葉が理解できない、しかし感情は聞き取れた。言葉にならない。うめき声しか出せない。..... 私の目はもはや、物を互いに離れた物としては認識できませんでした。...あらゆるエネルギーが一緒に混ざり合っているように見えたのです。...私の意識は覚醒していました。そして流れの中にいるのを感じています」。手術前、集中治療室での主観的体験。「わたし、もう、ここにいるべきじゃない。神さま、いまわたし、宇宙と一つなの。ずーっとつづく流れのなかにとけちゃった。...わたしの魂は自由に、しゅくふくのかわのながれにのるはずなの。ここから出して!」。そして、手術成功後、の感想。「左脳が判断力を失っている間に見つけた、神のような喜びと安らぎと静けさに身を任せるのをやめて、回復への混沌とした道を選ぶためには、視点を“なぜ戻らなくっちゃいけないの?” から、“どうやって、あの静寂な場所にたどり着いたの?” に変える必要がありました。.....この体験から、深い心の平和というものはいつでも、誰でもつかむことができるという知恵をわたしは授かりました。.....脳卒中を体験する前のわたしは、左大脳皮質の細胞が右大脳皮質の細胞を支配していました。左大脳皮質が司る判断や分析といった特性が、わたしの人格を支配していたのです。.....右大脳皮質の意識の中核には、心の奥ふかくにある、静かで豊かな感覚と直接結びつく性質が存在しているんだ、という思い。右半球は世界に対して、平和、愛、よろこび、そして同情をけなげに表現し続けているのです」。1 例報告なので普遍性があるかどうか、まだわかりませんが、出血あるいは梗塞による左半球機能低下時の主観的体験はたぶん“せん妄”として、今までまともに取り上げられてこなかったのだと私は思います。

以上の準備の上で、パウロの発作（使徒言行録 9.3-9、22.6-11、26.12-18）について、考えてみたいと思います。まず光が見えて、次いで転倒（意識障害）し、声が聞こえた、そして 3 日間失明していた、と書いてあります。そして他人をかたっていますが、“その人は樂園にまで引きあげられ”（2 コリント 12.4）とも書いてあります。これは発作中の**不快ではない感覚**および離脱感を示唆していると思います。この“発作”の原因は心因説、てんかん説、血流障害説などありますが、医学的に確定することは今では不可能で

す(当日、阿部さんよりマラリア説のご紹介がありました)。全くの想像上のお話ですが、ダマスコ途上、パウロの脳左半球機能(言語、分析、計算機能等。通常、優位に働き自己意識を支配)が何らかの理由で、一時的に広範囲に機能不全に陥った、と仮定します。この間、右半球機能により意識は非言語的に維持され、上記のジル・テイラーのような体験、“幻視体験”(非言語、非競合、共感、共生、一体感、愛、平安)をパウロは体験したかも知れません。何らかの幻聴体験もあったのでしょうか。この仮説は“その人は楽園にまで引きあげられ”(2コリント 12.4)という記述をよく説明します。しかし、それだけでパウロの回心とその後の熱心な伝道活動を説明するには無理があるように思われます。左半球機能低下による“平安感”だけならば、脳血管障害、断食、“修行”等でも生じうるかもしれません。山岳仏教の過酷な修行時に、トランス状態を経験する人もいと読んだことがあります。一般に、こうした“平安感”を体験した場合、競争的生き方が空しくなり、世を捨て、隠遁を選択する可能性もあるでしょう。東洋思想、神秘主義等にはこうした隠遁主義の傾向がみられるかもしれません。しかし、パウロの場合はその後、方向を 180 度転じ、熱心な伝道活動を開始します。これはどうしてでしょうか？パウロの場合、回復とともに圧倒的な**罪悪感と被救済感、被贖罪意識**があったのではないのでしょうか？なぜなら、イエスに従う者をさんざん迫害してきたパウロの内に、イエスはパウロの今までの行為を諫めつつも、冷厳な叱責をするのではなく、むしろ光と多幸感とともに顕現し、パウロに“直接イエスにお会いして赦していただいた。”という生々しい主観的体験感を与えたのではないのでしょうか？そしてその後、冷静に考えた時、“自分はなぜ、無償で赦してもらえたのか？”という疑問がパウロに湧き、悩んだはずですが。悩みぬいた末、パウロが辿りついた結論は、“私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対する愛を示されました。”(マ 7.8) とう被贖罪観だったのではないのでしょうか？そしてイエスの血により、罪から私たちを贖いだされたことは、決して古い儀式的、呪術的な意味ではなく、律法に従い、目に見える行いを誇り、それに依り恃んでいた“私はキリストと共に十字架につけられました。生きているのは、もはや私ではありません。キリストが私の内に生きておられるのです。”(ガラテヤ 2.19-20)という思いに至り、この意識がこの後のパウロの“使徒”としての伝道活動の動因となったのではないのでしょうか？

結語：パウロが言う“弱い時”とは、競合的、言語的脳機能が弱った時、己(言語的に記憶された実績と誇り)に恃めない時、であり、この時、それまでは言語半球機能の抑圧化にあった共感的感性(愛)の機能が優勢になり、“聖霊”や“キリストの霊”との交通がより活発になること、この状態を本当に“強い時”、と表現したのではないのでしょうか？脳科学を離れて表現すると、「“見える”の世界に依り恃む自分が**弱い時**、”見えない”世界に誠実になれる自分は**強い**(2コリント 4.18を参考に)」ということだと思えます。

最後に先人たちの解釈を記させていただきます。

矢内原忠雄(1938)：人生の目標、生活態度の着眼点を“見えざる国”に置く者こそ、人生の最大の勇者である。艱難も迫害も彼を脅やかすを得ない。本当に強い人間、しっかりした気力の人間はそこから生まれる。弱い人間が強者となる秘訣はここにしかありえない。

黒崎幸吉：その弱き時にキリストの能力は全うせられ、反対に自ら強しとして誇る間はキリストの能力は彼を離れているのである。